

2020年4月26日（日）久宝教会 復活節第3主日礼拝

聖書 ペトロの手紙Ⅰ 1章17-23節

メッセージ「この地上に生きるのだから」 岡嶋千宙伝道師（向島伝道所）

Introduction わたしのつながり

みなさん、おはようございます。岡嶋千宙です。わたしは、普段は、京都の伏見区にある小さな教会で伝道師をしています。自分では「伝道師の働きが本職である」と思っているのですが、費やす時間ということを見ると、この肩書きはふさわしくなかな、と思ったりもします。というのも、教会での働きの他に、平日、週末、祝日を問わず、福祉のお仕事と接客のお仕事をしていて、しかも、そちらに費やす時間の方が圧倒的に長いからです。

どの肩書きを使うかは、まあ、どうでもいいことなのですが、伝道師としての働きも、福祉のお仕事も、接客のお仕事も、どれもが、人と関わるお仕事、人とつながるお仕事です。人と接するのですから、やはり、今回の新型コロナウイルスの影響を、もろに受けています。接客のお仕事については、4月上旬、緊急事態宣言が出る以前から、自主的に休業となり、宣言が出された後は新型コロナウイルスの収束までは無期限で休業ということになりました。さらに、福祉のお仕事については、2週間ほど前から徐々に仕事が減ってきています。予定されていた支援のキャンセルが相次ぎ、今は週の大半を家で過ごすことが多くなっています。

新型コロナウイルスの影響が出だした頃は、「仕事が減る！収入が減る！感染したらどうしよう！」という現実的な問題にしか目が向けられませんでした。その問題に対する不安は、なくなっていますが、少し時間が経過した今は、その影響がもたらす別の意味を感じるようになっていきます。きっかけは、二日前、電車の駅のホームでの一コマです。

京都でのお仕事が終わり、奈良へ向かう電車を待っていました。ホームの椅子に座り、バッグから水筒を取り出しお茶を飲んだ後、蓋を閉めようとした瞬間。手がすべり、持っていた蓋を落としてしまったのです。蓋は、ホームの上を転がり、そのまま線路へポトン。まるでおむすびころりん。ホーム上から、落ちた蓋を呆然と眺め、降りて取りにいこうか、と考えたりもしましたが、思いとどまり、駅員さんに声をかけました。

同じような経験をしてご存知の方もいるかと思うのですが、こんなとき、駅員さんは、枝切りばさみを大きくしたような器具を使って対処してくれます。ホームの上から線路に横たわっている蓋をめがけて器具をのばし、ひょいっと挟んで取ってくれた駅員さん。その手から蓋を渡されたときはとても嬉しかったです。水筒の蓋ですから、大きくありません。これです。こんな小さなものに対して、あんな大きな器具を持っ

て来て、そして、丁寧に対応してくれたこと。それが嬉しくて、心が温かくなりました。時間にしてみれば、たかが10分程度のこと。ふとしたことがきっかけで生まれた小さな出会い。短く、他愛のないものですが、その駅員さんとの出会いを通して、他者とつながりあうことの大切さ、温かみを改めて感じたのです。

翻って、コロナウィルスの影響でお仕事が減り、人とつながる機会が減っているというもう一つの現実。その現実の中で、今、わたしはつながりが減ることによって、“わたし”という個人の一部までもがなくなり出しているような感覚を覚えています。

これは、わたしだけの話ではないでしょう。「外出自粛」「休業要請」「接触8割減」「Stay Home」……。全地球規模でつながることができにくくなっているこの世の中で、つながりが欠如すると共に、まるで自分自身の一部が削り取られていくような思いをしている方も少なくないと思います。

わたしたちを襲っている「つながりの喪失」というこの経験。それは、2000年前に、パレスチナの片田舎で生きた、イエスと言う名の人物も、経験したことでした。

Development 地上におけるイエスのつながり、死と復活

イエスは、出会いの中に生きた人です。特に、周りからは嫌われ、当時の社会体制の中では異質とされていたような人たちや、周縁に追いやられ、身寄りのないような人たちと多く出会っています。徴税人、皮膚病等の病気を患った人たち、悪霊に取り憑かれたと言われる人たち、罪を犯したと糾弾されている人たち、女性、子ども……。イエスは、そのような人たちと出会い、その人たちのそばにいて、一人ひとりの息づかいを感じ、声を聴き、共に生きることを選び実践した人でした。

しかし、他方でイエスは「つながりの喪失」を経験し、その喪失の中で感じる苦しみを抱きながら、死を迎えた方でもあります。「ペトロの手紙Ⅰ」2章4節に「主は人々から捨てられました」と記されている通りです。

そのイエスを捨てたのは、敵対関係にあるローマの人たちだけではありませんでした。同じ宗教背景を持つ同族のユダヤ人指導者たち。「救い主」と褒めたたえ、イエスがエルサレムに入場するのを歓喜で迎えた民衆。そして、イエスが公の活動を始めた当初から共に行動をし、イエスを慕って信頼していた弟子たち。イエスは、身近な人たち、近しいつながりを持った人たちからも捨てられたのです。さらには、「アッパ／父」と慕っていた神様からも捨てられます。「わが神わが神、何ゆえわたしをお捨てになるのですか」と嘆くイエスの姿が福音書には記されています（マルコ15:34、マタイ27:46）。

徹底したところまでつながりが喪失し、苦悩するイエス。その果てに待ち受けていたもの。過酷です。十字架。イエスは十字架につけられ、その上で死を迎えたのです。

イエスの存在が、ここで完全に途絶えたとしたら、わたしたちは、2000年経った今この時に、この人物のことを気にかけることはないでしょう。ですが、イエスの存在

は死で終わりませんでした。わたしたちが2週間前に、教会で礼拝を守った最大の理由。復活です。本日の聖書箇所「ペトロの手紙Ⅰ」1章21節にもあるように、神様はイエスを「死者の中から復活させて栄光をお与えになった」のです。

神様の大きい御業である「イエスの復活」という出来事によってもたらされたもの。その一つは「罪の赦し」、「贖罪」^{しよくざい}「贖い」^{あがな}です。罪のないイエスが、罪に満ちたわたしたちの代わりに死んでくれたことによって、わたしたちの罪は赦された。罪に満ちた生き方はなくなり、喜びに満ちた新しい生き方、命が始められた。「ペトロの手紙Ⅰ」に記されている次のような表現は、そのことを伝えてくれています。

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来の空しい生活から贖われたのは、銀や金のような朽ち果てるものによらず、傷も染みもない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」(1:18-19)

Turn 復活の意義：もう一つの声が届けるもの イエスの生前の姿

もちろん、「贖罪」^{しよくざい}を否定するわけではありません。罪の赦しは、わたしたちの信仰を成立させる上でなくてはならないもの、いわば、信仰の核です。しかし、復活によってもたらされたものは、「贖罪」^{しよくざい}だけではありません。「贖罪」^{しよくざい}がいわば、イエスの“死に様”からもたらされるものであるとすれば、イエスの“生き様”からもたらされる復活の別の意義もあるのです。

それは、イエスの“生き様”に対しての神様からの全面肯定です。そして、そのことを示唆してくれるのが、この手紙の中で言及されている手紙の受け手たちです。

1章1節によれば、この手紙は「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビテニアの各地に離散し、滞在している選ばれた人たち」(1:1)に宛てられています。これらの人たちは、もともとは多くの民族、文化、宗教が混在していた地域に住む異邦人であり、後にキリスト者として生きていた人たちでした。具体的な描写はなされていませんが、地域性、時代性からすると、その多くは、社会的地位も低く、奴隷や異教徒の夫を持つ女性や若者たちであったと考えられています。

手紙の筆者は、このような背景の人たちに対して、キリスト者として相応しく「すべて人間の立てた制度に従いなさい。服従しなさい」(1ペトロ2:2-14)と語ります。そして、中でも、「召し使い」と「妻たち」を取り上げ、それぞれに対し、「主人に従いなさい」(1ペトロ2:18)、「夫に従いなさい」(1ペトロ3:1)と勧告するのです。

あえて、このような人たちが特定され、「既存の制度、あり方、状況を受け入れよ」という勧告がなされるのは、そうではない現状があったということなのでしょう。ローマ帝国の支配下にあり、ヘレニズム文化の影響を強く受けていた地域にあって、それらとは馴染まないキリスト教信仰を持ち、生きるというのは、おそらく有形無形の相当の抵抗を受けることであったと推測されます。そのなかで、生き延びるために社

会の大勢に身を委ね、環境に適合し、既存の制度、それまでのあり方に留まる、というのはある種妥当な選択と言えるかもしれません。

しかし、選ばなかった人たちがいた。既存の制度、あり方、状況にとどまろうとしない人たち。強者、権力者に、「No」と言う人たちがいた。それはまるで、命の危険が差し迫りながらも、社会の流れに抵抗し、弱くされた者たちと共に歩み、生きようと声を上げ続けたイエスの姿を映し出すかのようです。

注目すべきは、イエスのその姿を想起させる人たちの一部として、「女性たち」が挙げられていることです。日本語では「妻」と訳されていますが、ここで用いられているギリシア語は、十字架につけられたイエスを見守った女性たちを表す単語でもあります。彼女たちは、地上におけるイエスの歩みに、最後まで付き添った人たちです。最も親しい弟子たちでさえも、イエスのことを見捨てる中で、イエスの死を最後まで見守った人たち。終わりまでイエスとのつながりを求め続けた人たち。親しい者に、社会に、世界に、見放され、つながりをなくす中で苦しむイエスの姿を目撃し、その痛みを自らの身に受け入れた人たち。

もちろん、その女性たちと、ペトロの手紙で言われている女性たちとは、全くの別人です。ですが、両者の置かれている状況は酷似しています。自分たち自身が弱く、追いやられ、声を上げることのできない存在でありながら、それでも、最後まで、愛するイエスとつながり、共に生きることを求め続けた女性たち。彼女たちの声が、ペトロの手紙に言及される女性たちの存在を通して、息を吹き返し響き渡るのです。女性たちの声は消されず、時を経て、今を生きるわたしたちを促します。「イエスの生前、死ではなくて生に、死に様ではなく、生き様にこそ、目を向けよ」と。

女性たちの存在から復活の意義をもう一度考えてみます。イエスの生前に着目して、復活を捉え直すのです。本日の聖書箇所、1章23節には、「あなたがたは……神の変わることはない生ける言葉によって新たに生まれた」と記されています。

わたしたちを新たに生かす「神の言葉」であるイエスの、変わらない姿とは、彼が生前にその身を持って示してくれた姿です。弱き者、周縁に追いやられた者たちと出会い、つながり、共に生きること。多数の声にかき消され、響くことのない小さな声に耳を傾けること。死を迎えることが分かっているながらも、それでもなお、つながりの中に生き、一つ一つの命、一人ひとりの生に、真剣に向き合うこと。その姿の絶対的肯定。つながりの中に生きることが神によって「良し」とされる。

それは決して、個々人の犠牲のもとに成立する全体の連帯というものではありません。「社会がこんな状況にあるのだから」、「みんなが我慢しているのだから」、「あの人があれだけのことをしたのだから」。そのような音を充満させようとする全体の流れに、むしろ^{あらが}抗^{あらが}う。抗いながら、個人の経験、思い、声を尊重し、共有する。個の経験は、全体の流れに打ち消されない。命の息吹としてあり続ける。一人ひとりの経験が、一人ひとりの思いと声大切にされる。そんなつながりの中に生きつづけるこ

と。

そのつながりを体現したイエスは、「変わることはない言葉」として復活し、今もなお、わたしたちのために、わたしたちの隣で生き続けています。イエスが作ったつながりは、今もなおあり続けているのです。それが、復活のもう一つの意義。

Conclusion 教会 つながりの希望へ

イエスを中心に据えた、つながりによって形成される教会という場。もちろん、今この状況下で、命の危険を冒してまでも、「特定の場所に集うべき」と言いたいものではありません。集いは控えられるべきでしょう。命は尊重されるべきです。

たとえ、集いが控えられ、具体的なつながりが少なくなっていくとしても、つながりが消えたわけではありません。つながりは存在し続けています。つながれないことの痛みや苦しみを覚え、共に祈ること。これも、つながることの一つの形です。むしろ、生身の身体を通して関わることができないからこそ、キリストの身体である教会としてのつながり、個々の痛みを、個々の弱さを感じ合い、分かち合うつながりが大切にされるのです。

だから、恐れずに。一人ではありません。あなたの声、わたしの声は、今もここに響いています。その声が、この地上で、この時に、イエスとわたしとあなたとをつなげ、わたしたちすべてを生かす、命の鼓動となっているのですから。